

第32回区民車座集会意見交換内容（多摩区）

- 1 開催日時 平成29年12月17日（日） 午後3時から午後4時50分まで
- 2 場 所 多摩区役所 11階会議室
- 3 参加者等 参加者26名、傍聴者21名 合計47名

<開会>

司会：それでは、定刻となりましたので、ただいまから第32回区民車座集会を始めさせていただきます。
私は、本日の司会を務めます、多摩区役所地域見守り支援センター地域支援担当の鈴木と申します。よろしくお願いいたします。

今回は、障害のある人もない人も認め合い、共に暮らせる多摩区をテーマに、区内の食品や小物などを売る事業所などと、企業・学校等が連携した取り組み事例をもとに、多様な主体による新たな可能性を模索してまいります。

本日発表いただきますのは、はっぴわーく様、多摩川あゆ工房様、いっぽ舎様、はぐるま共同作業所様でございます。また、発表いただく団体の取り組みに関連された皆様、新たな可能性について議論に加わっていただく皆様にもお越しいただいております。

次に、行政からの出席者を紹介させていただきます。

福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：石本孝弘多摩区長でございます。

区長：よろしくお願いいたします。

司会：それでは、福田市長から御挨拶を申し上げます。

市長、よろしくお願いいたします。

<市長挨拶>

市長：皆さんこんにちは。

第32回ということで、車座集会は何周目だろうな。毎月ずっと重ねておりますけれども、今日は障害のあるなしにかかわらず共生していこうという、そういったテーマで当事者の方もそうですし、そのサポートをしている方たち、あるいはその周辺でいろんな形で加わっていただいている人たちと、ざっくばらんに意見交換しましょうということで、楽しみにしてまいりました。

今日すごく距離近いなと思いますね。すごくいい雰囲気だなと思います。今まで、この距離感で、一番近いかなと思いますけど、そういう距離感の中で楽しくやりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

<意見交換>

司会：本日の進行方法をご説明いたします。

はじめに、4団体から取組事例の発表と関連する方々からのコメントをいただきます。その上で、市長と取組事例についての意見交換を行います。

次に、新たな可能性について、車座の2列目にお座りいただいている皆様にも議論に加わっていただき、

さらに意見交換を広げてまいります。

それでは、さっそく取組事例の発表に移りたいと思いますので、市長・区長は、席の移動をお願い致します。

それでは、一つ目の事例発表をお願いします。はっぴわーくの発表者の方、石井梨園の石井様、前へお進みください。

司会：それでは始めに、はっぴわーく、田中敦子様発表をお願いします。

田中さん：皆様こんにちは。はっぴわーくの田中と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

はっぴわーくは、主に精神に障害のある方の就労継続支援事業所です。平成21年9月に開所した当初は、内職の請負作業が主な仕事だったんですけれども、川崎の特産品である、多摩川梨のジャムを作りたいということで、石井さんに御相談をさせていただいたことが始まりで、石井さんからの御協力が得られ、開所2年目からはっぴわーくで独自でレシピ作りをしまして、ジャム製造が始まりました。始めは、身近な方や、福祉関係のイベントで販売するなど、こじんまりと活動していました。大きな転機は、平成24年にJRさんが企画する、地産地消メニューに採用されたことです。直接JRさんから、はっぴわーくのジャムが使用したいとおっしゃっていただいて、お電話をいただいたときには本当にびっくりしたんですけれども、利用者の方とも相談しまして、そんなに大きな会社の方から要望があったということで、すごくうれしいと、ぜひやってみたいという声がとても多かったのでチャレンジすることにしました。

というのも、これまでにない大型注文でしたので、いろいろとクリアしなければならない課題がたくさんあったんです。まず、材料である梨自体の量ですね。農家さんの協力なしにはできませんし、ジャム製造の稼働率も上げなければならない。1ヶ月の製造量もそれまでの倍近くなるように試行錯誤しました。

そういった意味では、本当に石井さんを始め、現在では梨の提供を3農家さんに御協力いただいているんですけれども、地域の皆さんの御理解と、応援してくださる気持ちがあつてこそ実現できたと、本当に感謝しています。

JRさんとの取り組みも今年で4年目になりました。中づり広告や駅にポスターを掲示していただいたことで、カリタス学園さんとの復興支援ジャムの製造にも、企画に繋がったり、あと仙台テレビでも御紹介いただいて、広くいろんな方に私たちのジャムを知っていただくことができました。さらに、去年東橘中学校の栄養教諭富田先生から、給食に使いたいんだということで、中学校に地域の多摩川梨を食べていただきたいという、すごく熱い思いをいただいて、今年の1月には4校ですね、3,000人分の給食にも多摩梨が使用されたことは、本当にうれしく、利用者の中には母校だという方もいらっしゃってとても誇らしげに話していたのを、とても印象的に残っております。

やはり、利用者の方も、自分たちがつくったものをお客様に喜んでいただいているということが、仕事のやりがいになっているようです。売り上げも年々アップしているので、工賃の面でも収入が上がることを実感して仕事への意欲に繋がっています。

現在では、多摩川梨だけではなくて、川崎産の果物や野菜を使ったジャムを10種類ほど製造しているので、ほかの商品でも発展できるよう、地域の皆様と協力しながら、川崎をアピールする取り組みを今後も続けていきたいと思っています。以上です。

司会：続きまして、関連する石井梨園の石井務様からコメントをお願いいたします。

石井さん：石井と申します。梨園は適当というか、ほどほどにつくっているもので、大した梨ではありませんですけど。はっぴわーくさんとの出会いは、私は前々から農業というのはやはり付加価値をつけなければいけないということで、やはり他にないものとこ、加工をすることも必要なということで、これはJ A川

崎の、そういう加工の講習会に出たり、大変興味をもっておりました。たまたま、はっぴわーくの方が私のところに来て、実は障害者の皆さんに梨のジャムを作ってもらいたいという話がありまして、私は自分がやりたいと思ったけど、この人の方がやる気がある気がしましたので、じゃああなたに全面的に梨は協力しますという約束をしまして、すぐにその年ジャムを作りましたんですけど、いろいろ、ただつくっただけのような感じだったんですね。ですから、これは売の場合は保健所の許可をもらわないと。要するに加工所をつくって、衛生面の設備を整えないと売ることができないと。その年は知人に頒布して、非常に好評だということを記憶に残っております。そして2年目、お役所の仕事は遅いのかと思っていたら早かったもので、あっという間に営業許可を受けまして、それから軌道に乗って機会があるごとに販売をするようになって、一応評判がよくて、よかったなと思っているし、いろいろ発展的になって、先ほどお話がありましたように、JRと組んだりして生産力も上がってきているという状況であります。それと、梨でジャムを作ることによって、私の梨園に障害者の方が来まして、梨もぎをしていたんですね。これまでは、自分もいで用意していたものとか、それから自分たち取ったものを、ごく自然に皮を剥いて頼んでたんですけど、そのとき一人の男の人がですね、女の方が梨を剥いてたんですけど、そのときに、おまえなんだ梨の皮が剥けるじゃん。そういうことをしていて、私も気づかなかったんですけど、そうしたらその女の子は爽やかな様子で、私は梨をジャムを作るので、作るときに剥き方を覚えてこうやって剥けるんだという。何か、こっちのほうよかったなという感じがいたしまして、この企画に乗って大変よかったな。ジャムもできたし、そういうことを考えてなかったことの成果っていいですかね、一人の女の子が勇気をもったというのはすばらしい、自然にできたのはありがたい、いい今年たなかと思っているし、いいです。

それと、これから、ますますたくさんのジャムを作る予定だと思うんですけども、多摩川梨は一昔から比べてほんの一握りしかつくっていないんですよ。それが、ですから、材料を有効に使わねば、一度あげたんですけども、梨というものがこういうふうにできて、たくさんできて下がってくる。その後また、新しい土がまたできてきたり、違う場所に。要するに、生ものですからそんなに日保ちはしません。

ですから、いかに梨の材料を取っておくかということが重要な課題になるんだと思います。せっかくあげたんですけども、冷蔵庫がいっぱいだからいらないっていわれて、あらそう、せっかく用意してきたのについて思ったんですけども、そういうようなこともあって、役所に申請しているんだけど、なかなか買ってくれそうもないとか、やらないうちにそんなこといつちゃだめだって言われて、ちょっと気合いを入れたいようなこともありましたけれども、私もいろいろ考えて、もし買ってくれないのであれば、傷ついた梨が多いですから、悪いところをカットして、かつその前に悪いやつか全部排除して、新しくきたものを、いいものを入れてあげれば、材料が増えるわけですね。それもいいかなと思ったんですけども、悪いところをカットして捨てれば、カットした分だけ余分に入るからよくなると。さらにもっと考えたのは、それだったら芯は使わないんだから、芯まで取って、それから皮も使わないのであれば、本当に使う、原材料だけを残せば生産力が一番増えて、年間を通してできるんじゃないかと。ただ、それはまだ実際にはやってないと思いますので、ちょっとはっぴわーくさんがこれからはそういう原材料のそのもの自身をいかに管理するかが課題かなというふうに思って、皆で研究し合って、年間を通して作業できることになれば、すばらしいことじゃないかなと思います。

以上になります。

司会：ありがとうございました。

本当にこの梨が、ほわんと甘くて、非常に上品なお味で、非常に評判が高いものです。

では続きまして、次の事例発表をお願いいたします。多摩川あゆ工房の発表者の方、カリタス女子中学高等学校の関係者の方、前へお進みください。

それでは、多摩川あゆ工房坪井雄様、発表をお願いいたします。

坪井さん：皆さんこんにちは。

社会福祉法人なごみ福祉会多摩川あゆ工房で、焼き菓子レゼルを担当しています。坪井と申します、よろしくお願いします。

今回3分間の発表ということで、私が発表しようと思ってたんですけども、利用者も一緒に来ていますので、せっかくなので今回、コラボレーションによって生み出されるものは何かということで、発表もコラボレーションで行わせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

佐藤さん：多摩あゆ工房のみんなのお菓子屋さんレゼルの利用者、佐藤と申します。よろしくお願いします。

坪井さん：我々は障害の有無・種別・程度にかかわらず、地域で共に生きることを支えるという、法人理念のもとに活動をしています。ふだんから、多くの地域の企業・学校・団体、近隣の皆様の御理解に支えられながら活動を行っています。

佐藤さん：焼き菓子レゼルでは、クッキー・パウンドケーキ・タルト・マドレーヌなどを製造販売しています。いつもお世話になっている地域の野菜や果物、蜂蜜などを使用し、少しでも地域に貢献できればと考え、日々活動をしています。ちなみに私は地域の梨をふだんに使った、タルト作りのプロフェッショナルです。今回のコラボレーションによって生み出されるものは何かというテーマのもと、我々あゆ工房と古くからお世話になっている、カリタス女子中学高等学校さんの、アンジェラスの会とのコラボレーションについて発表をしたいと思います。

坪井さん：アンジェラスの会の皆さんはふだんから教育里親活動や、街頭募金、我々の施設のお祭りで多くのお手伝いをしてくださったりと、多くの奉仕活動を行っている会です。我々の祭りも我々職員だけじゃどうしても回らないことたくさん、生徒さんがお見えになって、本当にいろんなことを気使ってもらって、それがなくしては本当に行えないお祭りをいつも助けていただいています。その中で、我々の施設の活動に興味を持ってくださり、我々あゆ工房の焼き菓子レゼルの取材に来てくださった際に、地域の販売会など、この役所でもそうですけど、地域のたくさんのお祭りで我々、販売をさせていただいているんですけども、その際とかには余り持っていけない、我々の最近の活動の主である、地域の保育園や学校の多くの行事で使用する焼き菓子のオーダーメイド、保育園とか小学校から、こういうものをつくってほしいって、ふだんの規格と全く違うものをつくっているというお話をした中で、ぜひアンジェラスの会のマスコットのキャラクターと一緒につくってみたいというお話をいただきました。毎年、文化祭ではたくさん我々のクッキーを買っていただいて、それを販売していただいたりということをしていたんですけども、今年はそのアンジェラスのマスコットの、こういうオーダーメイドを今たくさんつくってます。運動会のメダルだったり、保育園のクラス、キリン組だったりライオン組だったりというのを注文を受けて作ってます。

アンジェラスの会のマスコット、チャーリー君、チャーリーさん。チャリティから取った、チャリさんですかね。チャーリーさん、こちらのキャラクターと一緒に作りたいということでお話をいただきました。そうですね、そこまでの間、何度も何度も生徒さんと打ち合わせを重ねました。最初は、先生を通してこういうキャラクターを作りたいという、こういうものを送ってくださったりしてたんですけど、そのうち生徒さんがまどろっこしくなったのか、直接我々の祭りなんかに来てくださって、違うんだ、もっともっとこうしてほしいんだということを何度も何度も、つめて語りました。

それで、文化祭では毎年5万円くらいの買付だったところを、生徒さんが今年は10万円分チャーリーもやる、10万円分買いたいということで、先生は大変懸念していたんですが、文化祭のほうに、こちらのクッキー、これチャーリークッキーなんですけど、こちらを含め、結局先生の懸念をすっ飛ばして10万円分買付いただいて、見事全てを完売するという実績を残していただきました。もともと、我々地域の保育園

などでアレルギーのお子様に少しでもほかのお子様と遜色のないものをと始めたオーダーメイドをきっかけに、このような繋がりが生まれ、利用者のやりがいにも大きく繋がり、カリタスの皆様の達成感にも繋がったと、そのように我々は考えております。

佐藤さん：今後も、地域の皆様の御理解に支えられながら、我々も少しずつ地域に貢献できるような活動を目指し、皆様が安心しておいしく食べられる多摩川あゆ工房焼き菓子レゼルであり続けられるよう、努めていきたいと思います。

坪井さん：御清聴ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。では、続きましては関連する、カリタス女子中学高等学校アンジェラスの会からコメントをお願いいたします。

森さん：御紹介にあずかりました、カリタス女子中学高等学校の教諭の森と申します。カリタスは、多摩区にあります、私立の学校なのですが、カトリックの学校ということで、奉仕の心を大切にしております、これまで近隣の福祉施設の皆様には、ボランティアの受け入れですとか、さまざまな場面でいろいろお世話になってまいりました。我が校のアンジェラスの会という、有志の生徒による奉仕活動のグループがあるんですが、その中で私たちは主に近隣の福祉施設などに毎回訪問して、いろいろお手伝いをさせてもらったり、交流をさせてもらったりという活動をふだんしています。

多摩川あゆ工房さんにも、お祭りのお手伝いのほか、いろいろ訪問もさせていただいて、数年前からぜひ、いつもクッキーおいしい、おいしいと生徒たち買ってるんですけど、ぜひこれ文化祭で売りたいということで、文化祭でのクッキーの販売を始めまして、そして今年はぜひコラボしてクッキーを作りたいんだと生徒たちが申しましたので、何とか実現まで至ることができました。

そのときのことをちょっと生徒からも発表したいと思います。

漆澤さん：カリタス女子中学高等学校アンジェラスの会、近隣訪問グループの漆澤です。よろしくお願いします。

多摩川あゆ工房さんとコラボクッキーを作ろうと思ったきっかけは、とても単純なものなのですが、せっかく有志活動をして、多摩川あゆ工房さんとの繋がりを持てたということで、何か自分たちの思い出になるものを商品化して販売できたらなと思い、今回はアンジェラスのイメージキャラクターである、チャーリー君のクッキーを作ろうと思い、提案させていただきました。

当日は、チャーリークッキーは両日二日間の文化祭で計120個販売したのですが、両日とも午前中のうちに全部完売し、とても好評でした。今年は去年の倍のクッキーやケーキ、タルトなど計660個販売したのですが、売り上げが10万円近くで、全て両日とも完売することができました。

コラボクッキーを作る際、多摩川あゆ工房さんの理念である、なるべく購入される方が買いやすい値段、100円や200円、150円など、おつりとかが出ない値段で販売するという理念があるのですが、私たちがもっとこの味を強くしてほしいなど、願望する際も、この理念の中に納まるようにストロベリーの味を強くしてくださったりして、何度も交渉したのですが、私たちの要望に応じてくださるよう、とてもたくさん受理していただいて、本当に感謝しています。ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。それではお席へお戻りください。

オーダーメイドのスイーツということで、本当に買うほうも非常に楽しみで、またそれができるところが作業所ならではのかなと思って聞いておりました。

では、次の発表をお願いいたします。

いっぽ舎の発表者の方、株式会社研進の発表者の方、前へお進みください。

それでは、いっぽ舎の安田孝高様、発表をお願いいたします。

安田さん：いっぽ舎の職員をしています、安田と申します。いっぽ舎はNPO法人、いっぽいっぽが運営する、地域活動支援センター、二つ運営をしているんですが、このうちの一つになります。ここでは、脳卒中や不慮の事故で、外見からは分かりづらい、高次脳機能障害を合わせもつ身体障害者の方が主な支援対象として、日中活動の場所を提供していました。ここでは、日々活動時間では、皆さんの障害の状況に合わせた創作活動やパラリンピックの正式科目のポッチャ、リハビリを兼ねて右脳を活性化させる目的で、芸術療法を取り入れたアートなど、リハビリ的な観点から活動を行っていました。

今回、レンズメーカーHOYAさんがエコ事業の一環として、コンタクトレンズの回収を行い、回収に協力していただいた方に、お礼の品物として、福祉施設が制作した品物を配布する取り組みを行っていました。今回、株式会社研進の妹尾さんに突然、御連絡をいただきまして、仲介をしていただいたことで、いっぽ舎がふだん創作活動でつくっていたパンダマグネットからお礼の品物の一つとして選ばれました。

実際、リハビリとして行っていた創作活動から、今回、作品が選ばれ、実際の量が大量だったんですね。数でいうと2,000個だったんですが、二つセットですので、計4,000個作らなければいけないということで、職員側、支援者側としては、納期が間に合うのか、それから利用者さんの身体的な負荷がかかり過ぎるのではないかと、ちょっとオーバーワークになってしまうのではないかと、ちょっと不安が大分よぎったんですが、皆さん、本当に実際合計してやられると、私たちの予想を覆す感じで、メンバーが自分たちのできるパートをそれぞれやっていただいて、あっという間に納期よりも2か月ぐらい早い段階でできあがってしまったという結果になりました。

もし、このきっかけがなかったら、メンバーの達成感や社会に対して、こんな自分でもできることという、そういった自信や次へのモチベーションというのがふだんからの工作活動だけでは得られなかったんだなということを、改めて実感しております。

実際、この活動が終わった後も、メンバーさんの方が、また作らないのとか、こういう声が上がりまして、私たちはパンダロスというふうにいまして、またないのかと、これは本当にお願いという感じで、よろしくお願いしておりますって感じですが、そんな感じで私たち、本当に楽しみながらこれをつくってさらに、それが自信へと繋がったということで、本当に企業さんからの一言から、私たちや職員側やメンバーさんのモチベーションが一気に上がるということが出来るんだなという、いいきっかけになったということ、本当に御報告させていただきたいと思います。

以上です。

司会：ありがとうございました。それでは、それに関連する株式会社研進の妹尾祐子様からコメントをお願いいたします。

妹尾さん：研進の妹尾祐子です。どうぞよろしくお願いします。

今回、HOYA様のノベルティに関しては、2,000個という、通常ですとパンダの場合は4,000個になったんですけれども、数が多いんですけれども、私自身が実は川崎市民なので、ぜひ川崎市の福祉施設さんと一緒にお仕事をできたらなということで、ノベルティができないところを探させていただいて、それでいっぽ舎さんに声をかけさせていただきました。

非常に数が多いにもかかわらず、納期もきちんとしていただきましたし、処理も丁寧にしていただいたり、サンプル提案もいっぱいしていただけたのでHOYAさんのほうにも喜んでいただいています。

私たちは、株式会社研進は、実は障害をもった方々、ある方ない方、皆様すばらしい個性をもって、仕事

をできる能力もありますし、雰囲気作りに役立つ方もいっぱいいらっしゃるので、それを伸ばしていきたいということで、仕事の確保ということに念頭を置きまして活動しております。今日は、せっかく機会をいただきましたので、私たちの取り組みの御説明をさせていただき、多摩区の皆様方と一緒にできることがあれば、いろいろお声をいただきながら進めていければと思っております。

ホンダ技研様の仕事、自動車部品を平塚の進和学園がメインやっているんですけれども、ここではもう45年ISOをとってやっております。なので、そのようなノウハウも活かしながら、いろんな他業種にも力を入れておりまして、例えばスーパーの施設外就労ということで、パッキングですとか、あとは清掃作業。そしてあと、食品加工場もありまして、トマトジュースやミカンジュース、あとジャムを、先ほどもありましたけれども、私たちも湘南ゴールドジャムやトマトジャムも非常に人気があり、リピーターも高いので、今楽天等では販売していたり、障害者施設他の商品とのコラボレーションのギフトセットなどもつくっているんですけれども、こちらはもっと販路を拡大して皆様の仕事確保ができればと思っております。

それ以外には、命の森作りというのも行っておりまして、苗木作り、植樹を育樹を、福祉施設10施設で行っております。神奈川県を中心に、山梨や静岡の団体さんも一緒にやっております、助成金や企業様にも来ていただいて、学校等公共の場所に寄付を行っております。私の娘が通っています、川崎市の西生田小学校にも植樹をさせていただいたりもしていますし、企業様や豊島区にも買っていただいております。あとは、おやつシスターズということで、ホンダ技研の売店では、毎週日がわりいろんなものを提供していますので、そこでも多くの福祉生産の美味しいおやつをお届けしておりますので、もし一緒にできることがあればお声掛けいただけたらと思います。

今後一緒に盛上げていければと思いますので、私も川崎市民なので、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：ありがとうございました。それではお席へお戻りください。こうした企業様が増えてくるととてもウィンウィンの関係が増えてくるなというふうに思いました。

それでは、最後の発表になります、はぐるま共同作業所の発表者の方、カルペディエムの菊池様、前にお進みください。

それでは、はぐるま共同作業所、金田圭二さん、発表をお願いいたします。

金田さん：よろしくお願いします。

私は社会福祉法人はぐるまの会、はぐるま共同作業所の金田と申します。主に知的障害のある方と日々活動しております。今回、ご紹介いたしますのは、料理サロンというふうに呼んでいますけれども、ちょうどこの多摩区役所の向かいの建物の2階にある、カルペディエムというフレンチのレストランの料理長菊池さんが月に一度無償のボランティアで来ていただいて、一緒に行っております。利用者さんが作ることができて、自信をもって商品を僕たちが作りましてということでアピールして地域にかかわっていくというような、こういった商品開発というのが目的の一つです。

私たちは料理サロンと呼んでいますけれども、料理を通してプロのシェフや、それから利用者さん、事業所、我々職員のそれぞれの思いや、考えを出し合って、それらを共有し、またそれぞれが自己を実現していく場でもあると思っております。

いきさつとしましては、もともとレストランで我々の栽培した、宮前の稗原、水沢というところに稗原農園ということで、野菜やハーブ等々を栽培しておりますけれども、これらをレストランで使って料理を提供していただいたというようなことが縁なんですけれども、詳しいいきさつはこの後シェフのほうからお話ししていただきたいと思います。

私たち、こういったサロンを通して、求めているものとしては、ぜひその一流の知識や技能を吸収し、またその先に利用者さんの所得の向上、工賃の向上、そういったことを目指し、またいろんな人がかかわるこ

とで、地域の共生だったり、共生社会の実現、それに向けて近づくことになるというふうにも思っております。

ただ、同時に私たちがこういうふうにしたいということだけではなくて、やっぱり必要とされたいというように思いもあります。単なる恩恵の対象といいますか、してあげるよということだけではなくて、必要とされる、いてくれてよかった、はぐるまさんにいてほしいなというような、思ってもらえる存在になりたいなと思っております。なので今日この場で、いろんな方と繋がって発展していけたらと思っております。

この、スライドの写真が、ある料理サロンの日に日本女子大の社会学科の学生さんに来てもらって、利用者さんと一緒に料理してもらい、かかわり合うということで、この学生さんの学べる場として提供させていただきました。そのような形で、我々だけの場にとどまらず、このような形で発展させていけたらなというふうにも思っております。

私からは以上です。

皆さん最後に、今日は一緒に利用者さん、いつも行っております長原さんに来てもらいまして、一言だけコメントを言ってもらいます。

長原さん：私は菊池さんに料理サロンを教えてもらって、計量したりとか、あと、泡立てるのがとても楽しいです。

金田さん：ありがとうございました。

司会：続きまして、関連するカルペディエムの料理長、菊池猛様からコメントをお願いいたします。

菊池さん：皆さんこんにちは。

フランス料理をやっています、カルペディエムの菊池と申します。カルペディエムというお店は、今年オープンしたばかりなんですけれども、その前までは、ビストロカプリシューというお店で、6年間料理長をさせていただきました。

ビストロカプリシューで料理長をやるに当たって、一番最初に決めたのがやっぱり、農家さん、業者さんとしては農家さんを一番最初に決めたいなんですけれども、今では有名な小泉農園ですね。小泉農園さんと、あと、はぐるま農園。この2社で一番最初に決めたんですけれども、そのオープンした年から、すぐにファーマーメイド活動という一環で、農園フェスというのをスタートさせました。農園フェスをやるきっかけとしては、ビストロカプリシューがオープンするその前の年に、実は栃木県の足利のココファームですね。このころみ学園に行きまして、そこで収穫祭に参加して、ワインを飲みながら畑で空を見ていたんですけれども、幸せだなと。ステージを見ると、障害者の仲間たちがフラメンコを踊るんですけれども、全く違う振り付けで踊る姿を見て、とても個性的だなと。それを見たときにちょっと涙が出てきてしまい、それが一番最初の農園フェスのモチベーションでもあり、はぐるまさんと出会ったときにはもう農園フェスをやるよってはじめから言ってたぐらいだったです。

そんなこんなで農園フェスを続けている間に、独自化とか、畑でできたものをどう有効に活用していこうかということと一緒に考え始めて、田園調布学園大学の生徒さんと一緒にお料理をつくっていたんですけれども、そのときに、この長原さんが当時参加しているメンバーではなかったんですが、ちょうど通りかかったときにやりたいって泣き出しちゃったんだよね。その涙があったから、僕は今年、皆のために料理教室をやるからということを決めて、この料理サロンの企画というものがされた。

この料理サロンといってますけれども、始めは料理教室と言っていたんですけれども、やはり僕は技術を教えるのではなくて、一緒に学び合う、そういうスタンスでいたいと思っていたので、サロンという名前に変えました。この料理サロンというのは、成功を学ぶのではなくて、失敗を学ぶ料理教室、料理サロンであ

り、失敗をした上でスタッフの方、仲間たち、皆が学び合う、そういうものにしていきたいなという、今年一年活動してきて、決して生産的な料理教室ではなくて、内面的なところを磨いていく料理サロンであるんじゃないかなというふうに考えてます。

そろそろ時間ということで、以上です。

司会：プロに学ぶというところでは、非常にモチベーションが上がるものだったと思います。

皆様ありがとうございました。

それでは、市長・区長、もとの席のほうにお戻りいただきまして、これから、発表いただいた取り組み事例について意見交換を行っていただきますが、多くの皆様に御発言をいただきたいという趣旨から、発言時間は1回につき3分程度を目安とさせていただきますと思います。

時間になりましたら、あちらに先ほどからちらちら出ておりますが、このような表示をさせていただきますので、発言取りまとめの御協力をよろしくお願いいたします。

それでは、ここからの進行は市長をお願いいたします。

市長：皆さん、発表ありがとうございました。

随分短かったですね。もっと聞きたいなというふうに思ったぐらい、皆さんの発表を楽しく聞かせていただきました。先ほどのお話ありましたが、皆が必要とされるというふうなお話ありました。それぞれの団体もそうでしょうし、それぞれの個人も、それぞれがみんな必要とされているということですね。皆さんの発表を通じて、改めて感じさせていただいて、すてきな発表だったというふうに思います。

それぞれの、団体の皆さんと、図らずも協力関係になった皆さんとの出会いというのは、どうしてそんな繋がったんだろうというような、すごく不思議な出会いだと思います。もともとそうですね、石井さんは御自身で、六次産業化というか、やりたいなと思っていたところに来られたという話で、石井さんの存在はもともと知ってたんですか。

田中さん：そうですね、多摩川梨、石井さんはさんすごいいいところにつくってらっしゃるんですね。南武線の線路から見える、目立つ場所で。

市長：それは電車を見ながら、梨畑が…という、そういう感じで、その農園に突撃したら石井さんがいたという感じで。

田中さん：そうですね。

市長：そのぐらい突撃ですか。何の事前調査もなく、突撃したという。

来られて石井さんも結構びっくりされたんじゃないですか。

石井：いいときに来たなと。先ほど話したようにですね、何ですかね、情熱もあつたんですよね、すごく。ツバサさんという女の人が来て。だから、私がいわゆる障害者団体、社会に役立つならそっちでやってもらおうという。

私がやれば2、3年かかったかもしれないしね。できないかもしれないし。

市長：比較的でも、先ほど、役所仕事は遅いかと思っただけというふうに、ドキッとしましたけれど、役所の手続のことだけでなく、いわゆる2年目からもう販売に入れたというのは、非常に早いですよね。それは、やっぱり、もちろん石井さんの御協力というのは大きかったと思うんですが、田中さんの、そう簡単に

2年目から販売にいくものですか。

田中さん：そうですね、初年度は研究を重ねたんですね。その次の年から販売をしたいと。障害のある方が自信をもって商品として出せるものを、まず研究段階が大変だったんだけど、それを作るということで、利用者の方々が奮起した結果だと思います。

市長：それこそ、JRさんから声がかかったというふうなのは、僕もそれ聞いて最初、このニュース聞いてびっくりして、よくJRさん知ってたなと、最初のこの話をびっくりしたんですけども。これもまた突撃ですか。

内田さん：そうですね、突撃というか、これはちょっと調べていったんですけども2014年の10月ぐらいなんですが、車両を新しいものに全部取りかえたり、それに伴って駅をちょっときれいにしたりということで、沿線を活性化しようみたいな取り組みがあったんですけども、ハード面じゃなくてソフト面でも何かできないかということを考えまして、その中で川崎が農業をいろいろやられていることを知りまして、その中で多摩川梨というのが、名産であるということを知りまして、その多摩川梨を加工されてジャムをつくっていらっしゃるはっぴわーくさんというのがいるらしいということを調べて、それをもとに一度田中さんのほうにお伺いして、梨ジャムを使って駅の構内のお店でメニューにして沿線の皆様に御紹介できないかなというところがきっかけです。

市長：JR東日本さんと川崎市が包括連携協定を結んで、沿線の価値をもっとお互い高め合っていきたいというふうな形になったんですけど、そういうこともあって、本当にJRさんがこういうことまで考えてくださっているのかということで、すごくびっくりした思いがあるんですけども、こういうJRさんみたいな方もいらっしゃるし、あるいは先ほど大手で言うと、HOYAさんの取り組みですね。ああいうことを繋いでいただいた研進さんが、繋いでいただいたことによって、パンダのが出てくるという、ああいう企業の皆さんからのリクエストというか、こういうことをやりたいんだというのは結構あるものですか。

妹尾さん：そうですね、企業様のほうも、思っているんですけども、やっぱりそれをどうやっていくかということは悩まれているところはあると思うんですね。なので、私も、朝日新聞さんもお声掛けさせていただいたりしてますけれども、いろんな方々の御紹介がうまく繋いでいってくれて、そういった障害者なり、あるいはノベルティを出したいんだみたいなお話がいただけたりするので、やっぱり人と人の繋がりが一番かと思われま。

市長 この、正しく理解していればいいんですけど、研進さんはそういうまさに繋いでくださっている会社さんですか。

妹尾：そうです。私たちは、企業様と、あと福祉の施設の方々、あるいは行政の方々となぐことで、そこに仕事なりコミュニティをつくっていくということをしている組織です。

市長：そうですか。何かこういう会社さんが、組織がもっとふえると企業の皆さんとも何か協力したいなという気持ちはあるんだけど、あるいはそういう価値を高めたいと思っている会社さんってあると思うんですよ。どうしたらいいのかなというところが結構ネックじゃないかと思うんですけど、そういうことって多いですね。

妹尾さん：そうですね。なので、もちろん議員の方々が、うまく、それから悩んでいらっしゃる企業がいるんだけどみたいなお声掛けをいただく場合もありますし、本当に、1個植樹の話が逆にノベルティの話になったり、関心の高い方がプラスアルファのチャンネルをまた紹介してくださるので、それをうまく繋いでという形で今やっています。

市長：なるほど。それこそ、ここにいらっしゃる人たちでもいろんなコラボレーションがまた、生まれるといいですね。

妹尾さん：あと、やはり福祉同士の連携も非常に大切かと思っております、何かイベントとか、いいお話はあるんだけど、やりきれないということも非常にあるんですね。それは、マンパワーだったり日程の問題で。せっかくのお仕事なので、それを私どもはその福祉施設さんのできる能力に細分化したり、工程を分けさせていただいて、ではここここの施設さん一緒にやりましょうということ可能なので、それをして、なるべくやっぱり仕事を出すほうとしては、イエスをもらって施設も安定して、納品しっかりしているとまた頼もうというサイクルが生まれますので、数を増やそうか。なので、一応そこも注力を注いでおります。

市長：なるほど、こういうふうに繋ぎ手があると非常に助かるなと思って、先ほどお話の中で、楽天なんかで、セット物で違うところとセットにしてパッケージ化して売るというふうが話がありましたけど。

妹尾さん：そうですね。楽天の場合、トマトジュースは非常にリピーターが高く人気があったと。湘南ゴールドジャムも地元のものなので人気があるんですけど、今回は福祉施設のオリーブオイルと一緒にコラボレーション商品をしたり、それと楽天はそれなりに経費がかかるんですね。でも、そこを我々サイトを開けてますので、お互いが相乗効果をもってやるということが一つだと思いますし、実はトマトジュースとカレーのバーターやってることもあるんですね。我々がトマトジュースをそこに納品し、その分だけのカレーを買ってるんですね。

商品交換をすることで、商品ラインナップが見えますので、やっぱりトマトジュースばかりずっと飲む方も、カレーばかりずっと食べる方、いらっしゃるんですけど、福祉間連携でお互い商品をバーターすることによって、施設間の周りの方々も買うし、消費者にもなり得るので、そういうこともまた川崎市内でもいろいろできたら楽しいのではないかなと思います。

市長：おもしろいですね。いろんなアイデアが生まれてくるのが、今日勉強になっています、今。

妹尾さん：こちらこそ、呼んでいただいてありがとうございます。

市長：一昨日ですね、世田谷区でイベント、二子玉川で川崎市の市民ファンドをやっている方と、世田谷区で今度市民ファンドを立ち上げたいという方で、共通の合同の立ち上げ頑張ろう会みたいになって、世田谷区長も僕も両方出席していったんです。

そこの休憩時間に出てきたのが、何とはぐるま農園さんのハーブティーが出てきて、世田谷区側からは、ころころさんといいましたかね、クッキーが出てきて、ここで休憩のときにクッキーを食べてハーブティー飲んで、物すごい組み合わせでおいしいんですよ。これは妹尾さんのお話聞いたみたいに、これセット物にしたら本当絶対売れるなという、それぞれの商品で物すごいすばらしかったんですね。

妹尾さん：なので商品、すごく、お互いに引き立つという相乗効果もあるという気がしますけどね。

市長：今の話聞いてどうですか、はぐるません。

金田さん：そうですね。確かにこれはそのとおりで、横で話を聞いていながら、こういう存在の方がいたら、多分皆さん思っていると思うんですけど、こんなに力強いことなんじゃないかなと思うんですね。もちろん、我々の力で開拓してやっていく必要はあるし、そうしなくちゃいけないんですけども、現実的に、じゃあそれができるかという、なかなか進みづらいというのは確かなんですね。こういった存在を今日知ったので、これからコラボじゃないんですけど、お話を聞きながら繋がっていくというきっかけになったらいいんじゃないかなと思います。

市長：そうですね。はぐるさんの取り組みで、川崎の名産品にもなった、川崎ハーブソーセージ、あれこそ、コラボレーションの究極版みたいな話で、ハーブははぐるさん、お肉は宮崎だったんですね。でも、デザインも川崎の方で、売っているところも川崎の企業というふうな形で、皆企画からデザインから販売まで、全部がコラボレーションでやっているんだけど、しかしこれ、別に障害者がつくっていますということで全く売ってないですものね。完全に川崎ハーブソーセージという、すばらしい商品がたまたまそういう形だったということで、全く分からないですものね。すばらしい製品を作り出しているというので、こういうことってすごく大事だなって思いますよね。いわゆる、福祉製品ということではなくて、本当に商品としてすばらしい、おいしいというふうな、付加価値の高いものを皆さんそれぞれのところでやっていただいているなと思って、やっぱり聞いていて、あゆ工房さんの、これもびっくりしたんですけど、オーダーメイドのクッキーというのが、最初アレルギー対応のことから始まったっておっしゃってましたでしょうか。

坪井さん：そうです。近所の保育園とか、もともと保育園のおやつなんかはずっと出していたんですけど、それ以外に行事なんかで使うときの注文で、やっぱりアレルギーのお子さんもいるんですけど、そういうお子さんのものが皆と違った形になるのが困るだとか、あとは間違いが起こってはいけないので、皆の分をアレルギー対応、皆卵を抜いたものとか小麦を抜いたものというお話で、何とかできないかっていろいろ勉強して、生産ラインの中から除くというのは難しいです。同じ部屋で使ってますので、皆保育園で同じ食器を使って食べたりとか、加工の乳だったら大丈夫だということをちゃんと確認した上で、そういうアレルギーの対応の研究なんかをしていく上で、だんだん注文も受けるようになってから、それから保育園の栄養士さんからいろんな多摩区以外の区にも栄養士さんが点々としていく中で、あそこは作ってくれるみたいな話から、オーダーメイドでいろいろ行事ごとのものを作ってくれという注文が多くなって、それをきっかけにカリタスさんからも、そういうのでいいんだたらうちのチャーリー君というお話をいただいて始まりました。

それで、先ほどの研進さんのお話じゃないんですけど、カリタスのほうでそれだけの数を、この間600個とか700個売ってくださったことで、カリタス近隣の方だったり、小学校だったり、卒業の同窓会とか、その文化祭で買って食べたことによってこちらに連絡が来て、注文だったり販路を拡大したりすることもあるって、皆様はチャーリー君つくって盛り上げていくというところと、それを売ってくださったおかげで食べたお客さんから、我々に別のところからまた注文が来るというのがすごく大きな営業効果もあって、すばらしい感じって。

市長：これはやっぱり、学校のこの伝播力って物すごいものがあると思うんですけど。

坪井：いやあ、それはそうですね。

市長：どうですか、伝播したほうという立場から。

漆澤さん：最初は本当に660個売れるか不安だったんですけど、せっかく売るなら、私たちはあゆ工房さんのお菓子が大好きなので、たくさんの人に知っていただきたいなと思って、今回は勝負に出ようと思いました。

本当に回りの人からも、文化祭に来た方友人とかからも、本当においしかったとか言っていて、あゆ工房さんのアピールにも繋がれたので、本当によかったなと思います。

市長：ちなみに今何年生ですか。

漆澤さん：高校2年。

市長：高校2年生。立派ですね。立派な勝負に出ましたね。すごい。

坪井さん：すごいです。直接漆澤さんが、我々のところに、先生のいないところに来てくださって、これだけの数を注文したいということで、去年の倍だったんですけども、先生から別の連絡があったときに、先生、今年とてつもない数希望いただいているんですけども、知ってますかというふうに言ったら聞いてませんというふうに言っていて。その後、先生といろいろいって先生も結局皆もこれならやれるんじゃないかということで、ちょっと何とかとめようと思いますと先生おっしゃってたんですけど、結局生徒さんの勢いとやる気で結果も残して、すばらしい形になったんだなとびっくりしています。我々もすごく、それに押されて、皆で何とかチャーリー君をより理想に近づけられるようにって、やる気も起こりましてすごく助かりました。

市長：先生、生徒さんの力に押されたというか、何かやればできるということを教えてもらった感覚ですかね。でも本当に、価値の高いものを作り出すというか、オンリーワン。まずアレルギー対応から始まって、オーダーメイドになって、販路が開拓されて、いろんな団体だとかのところからオーダーメイドでこういうマーク入れてもらえませんかというふうなものに繋がっていくということですよね。

坪井さん：そうですね、本当にそれをきっかけで今、田園調布大学さんも、校長のクッキーなんかも今作らせていただいたりとか、いろんなところから口コミで広がって、御連絡をいただいてオーダーメイドの制作をさせていただいています。

市長：確実にやはり、売り上げが増えていますか。

坪井さん：はい。

市長：今、言われ感ありましたが。でも、佐藤さんやりがいがありますでしょう。

佐藤さん：そうですね。

市長：確実に頼られているというか、必要とされているというか、お願いしますって皆くる訳ですよね。そのオーダーメイド。

佐藤さん：そうですね。

市長：ぜひ頑張ってもらいたいと思います。

はぐるまさんにもお話聞きましたね。それでは、ちょっと後ろの席にお座りいただいている方で、ちょっと何人かからお話を伺いたいなと。川崎から世界への、新田ボクシングジムの新田さん、会長ですね。来ていただいておりますけども、高校生も、高校2年生もすばらしいチャレンジをしていただきましたけれども、新田さんも本当に地域の中で、いろんな地域貢献をしていただいておりますけれども、今までの皆さんからのコメントでもよろしいですし、新田さんが取り組まれていることでも結構ですので、何かコメントいただけましたら。

新田さん：川崎新田ボクシングジムの会長をしております新田と申します。地域密着とボクシングを通じた人間教育というものを理念として活動しているわけなんですけれども、こういった形で、障害のある方とともにというふうなことに、余りこれまで御縁はなかったんですけれども、今日いろいろお話を聞かせていただきまして、大変に感動というか、こういう取り組み、非常にすばらしいなと思っているところでもありますけれども、実はここに参加させていただく際に、区役所の方に来ていただいたときに、ちょっとそんな関連のお話をちょっと考えさせられてお話させていただいたんですけれども、元世界チャンピオンの長谷川穂積という、少し有名なチャンピオンがいて、その長谷川穂積が所属していたジムに、ジムの活動として絆シートというのがありまして、ボクシングの興行イベントの際に、障害のある方々を御招待をする。ただ、御招待する際には、地元の企業の皆様方にチケットを、シートを買っていただいて、企業の方々には広告宣伝と、それから会社としてのそういった取り組みというものを一つの活動としていただくと。ボクシングジムのほうは、そういったシートを買っていただいて、興行資金というのは非常に莫大な、出演者やファイトマネーとかですね、会場料とかかかるもので、そういったものに資金の一部に充てさせていただくと。そして、実際に招待されて来ていただく方々については、ボクシングって余りなじみのないものかもしれないですけど、選手たちが一生懸命自分の人生をかけて戦っている姿を見ていただき、夢と勇気と感動を味わっていただくと。

またその会場で、実はこういった皆様方が作られているような商品を、ブースを出していただいて、そこで来ていただいたお客様に買っていただくというような活動をされているんですね。

なので、ジムにとっても、企業様にとっても、そして見に来ていただける障害のある方々にとっても、非常に意義のある活動だなというふうに私も思っておりまして、川崎でもこういった活動を今後やっていければいいなというふうに考えておりまして、3月にカルッツかわさきというところで主催興行をやる予定なんですけれども、そこでちょっとそういった活動をぜひ、まさに勝負に出たいなと。

先ほどありました、チャーリークッキーじゃないですけども、チャンピオンクッキーとかですね、例えばオーダーメイドでさせていただいたりとか、例えば今考えたんですけど。そんなようなことを一つ今、ふと感じながら話を聞かせていただいたところでございます。

市長：区民車座集会で商談がまとまりそうな。すごいことですね。

会長ありがとうございます。

実は、こういうスポーツとものすごく関係するこういう、今、会長がクッキーやってみようかなっていつてくださったように、僕なんか、感覚でいうと、フロンターレが優勝しましたし、フロンターレの何かグッズをシーズンで、このシーズンはこんなノベルティみたいなものがあるというふうなのが、年間を通じて、ワンシーズン続けてまた来年のシーズンはまた違うものというふうなのが、定期的に1年間ずっと継続してというのが、これ大事ですよ、作業としてね。ですから何か特殊なことというよりも、続けてやっていけるようなそういうものってできないかなと思うし、本当にサッカーだけじゃないですけども、川崎Bリーグもそうですし、いろんなスポーツがあるので、こういったところとコラボレーションというのもお

いにあるんじゃないかなというふうに思いますね。

ありがとうございます。

商店会から安陪会長に来ていただいていますけども、今のお話聞いていかがですか。

安陪さん：安陪と申します。私もお話を聞かせていただいて、あっと思ったことは、今、商店会では各お店の店主さんなどが、近辺ではまちゼミというのを開いておりまして、自分の特技とか関心のあることをお客さんと5、6人単位でお話をして講座を行っているんです。それで、施設の方々とのおつき合いの中にいろいろ御趣味もお持ちの方もいらっしゃるんですね。ぜひ、何か機会があったとき、そういうお話をさせていただいたらまた新たな発想でお店の方も勉強になるし、施設の皆さんにはまた、いろいろな作業の進め方とか何かで新たな展開を見つけ出すことができるんじゃないかなと、このような結びつき、その機会に何とか利用して、考えを活性化していきたいと思っております。

市長：ありがとうございます。

まさに、菊池シェフは地元で御商売しながら、新たな結びつきをつくって、お店でハーブなんかを使ったり、野菜を使ったりということで、新しい価値を生み出して、まさに地元の商店の中でやっているという中から、ぜひこういうことというのはすばらしい価値を生み出しているというのを、周りにももっと広げてもらいたいなという。まず、ここの菊池さんの取り組みを皆に知ってもらって、皆に食べてもらうということが大事なんだと思いますけど、少し横展開みたいなことって、どんなことが考えられますかね。

菊池さん：基本的には、自分の考えとしては地産地消というのが元でありますし、やはり地域の経済を意識して、近隣の農家さんがつくっているもの、それをまず僕らが手に取って、それをどう消費者に渡していくかということを意識して、やはり飲食店の人たちもそうだと思うんですけども、そういう人たちがしっかりと持たなければいけないんですが、なかなか難しいなというところで、やっぱり大きな経済に飲まれやすい、安いほうを手に取りますし、著名なブランドを手に取りますし、今ではいろんなところからいいものがすぐに手に取れるような便利な時代なので、なかなか難しいなとは思いますが、その反面僕は、そういうのが嫌いなので、たとえデコボコのカブだろうが何だろうが、それをおいしく調理するのが自分の仕事でもあり、生きがいでもあると思っているので、なかなか周りの飲食店の方と同じ価値観を共有しづらいなというのは実際歯がゆいところです。

市長：しかしやっぱりはぐるまさんのハーブだとか野菜を使って、味的にもよかったなというふうに思われていますか。

菊池さん：思います。

市長：本当に、消費者としても顔の見えるというのはすごくいいなと。おいしいし、ああはぐるまさんのでしょというふうになると、それだけでもうワンランク、プラスアルファをもらったような気がするという感覚というのは、多くの消費者は持つんじゃないかなというふうに思うんですよね。

石井さんのところの、ちょっと傷ついた規格外の梨、そんなに出るものですか。今まででも、ジャムになる前はようになってたんですかそれは。

石井：自分のおやじがやってたときは、虫に食われたとかそういうのはなかったんですけど、手拔きの石井ですから、虫だとかそういうのに、自然界の人は人間より利口で、おいしいものに虫が刺して、まずい梨には鳥はつつかないんですよ。ですから、鳥には冗談で言っているんですけど、うちの梨はまずいから食わな

いでくれというんだけど、何か知らないけど、消毒が足りなかったりそういう手抜きをしていますものですから、規格外が結構出てきていますけど、もう少し真面目にやれば規格外の梨が出ないんじゃないかなと思います。

それからあとは周りの環境とかですね。いろんな周りの家、植木があるけどそういうところに害虫がきたりとか、病気が来たりとか、それがこっちのほうはいっぱい葉っぱがあったり緑があるから遊びにきて病気になるんじゃないかなと思いますね。きちっと管理すればいいんですけど。ただ、農作物というんですか、自然にできた花もそうなんですけれども、相手は口を聞かないんですよ。今、病気にかかっている人間だったら、あそこが痛いとか頭が痛いとかというけど、そういう作物というのは何も言わないわけですよ。ずっと我慢している。虫に食われてもかゆくてもかゆいとも言わない。人間だったら大変な大騒ぎをしている。ところが、そういうところをよく観察すればわかるわけなんですけれども、そういう技術がまだ私にはないんじゃないかなと思っているんです。

市長：あんまり石井さんが頑張って、規格外のものがなくなってしまうとはっぴわーくさんが。

田中さん：大変困ります。あんまり真面目に……。でも、本当に先ほど、石井さんの発表の中で、たくさんあるんだからって全部無駄にしないで使ってくれよって、すごくその気持ち私たちに本当に心が痛いほど感じていて、ただ施設のほうはまだ規模が拡大できないですし、本当に狭いところで、6畳のところでジャムつくっているの、本当に保管をするのが難しいんですよ。でも、この5年間つき合ってやっていく中で、石井さんからすごく助言をいただいて、大きな冷凍庫を買ったりして。少しずつ皆さんの収入にも繋がるので、その辺は私たちの今の課題です。

市長：今、年間を通して梨の季節と、それから何種類もジャムを作られていますよね。年間を通してできるようにはなっているわけですか、いろんなフルーツで。

田中さん：そうなんです。今、都市農業振興センターが主催している農業連携フォーラムにも私たち参加させていただいて、農家さんと直接繋がることできるようになったんですね。トマトですとか、あと梅ですとか、季節を通してキウイですとか、いろんな作物を農家さんから直接仕入れることができるので、そんな状況です。

市長：本当に今言っていたように、今川崎市でもこういう農業連携フォーラムという形でやらせていただいて、都市農業の新たな可能性ということで、いろんな方に入っているんですが、そういうところで繋がると、また違う展開、コラボレーション出てきますよね。ありがとうございます。そういう、いい事例を実践していただくと、ほかのところでもまた新しい、いいものが出てくるんじゃないかなというふうに思っています。

今日は、大学のほうからも来ていただいているんですけど、和（かのう）先生お見えになっていますけれども、和先生いかがでしょうかね。ちょっとコメントいただきたければと思います。

和さん：田園調布学園の和と申します。よろしくお願いいたします。

先ほど、あゆ工房さんから、音楽、なでしこのクッキーをつくっていただいて、この間、福祉の実習があって、そのときに実習先の皆様の招待するときに、おいしく食べさせていただきました。ありがとうございます。

大学というところはいろんな役割があると思うんですけども、まず、今日皆様方の発表とか、今まで議論させていただいて、やっぱり福祉というのをあんまり前面に出すわけではなくて、いいものをつくって、

そして我々消費者が、これはいいよねという、要は当たり前の社会をどうデザインしていくかということがとても大事だと思っているんですけど、一つエピソードがありまして、私たちが菊池シェフと出会ったエピソードが、もしかしたら福祉をデザインする一つのいいストーリーかなと思っているんですが、6年前に菊池シェフが、ビストロカプリシューというフレンチのビストロを作られて、私は多摩区の住民なので、生田緑地すぐそばに住んでいて、おいしいフレンチのお店ができてたよと、妻がママ友とランチ会やったんで、行ったんですね。そしたら、ただ料理を楽しみに行っただけなんですけど、菊池シェフが、これ、はぐるま農園って言って、障害者の人たちが作るとてもおいしい野菜なんですよ、ぜひ食べてみてください。それで、小泉農園という、地元の野菜を使っているんですよみたいな話、おもしろいレストランなんだなと思って。何ではぐるまの仲間たちが作った野菜がおいしいと思いますかみたいな、それは農薬を使わずに手間暇掛けて雑草を取って、茎がこんなにいっぱい養分を吸って、だからおいしいんですよと。あんなほどと。食べたらいっぱいおいしいですね。また、フレンチの店ですからワインを飲みますよね。そういうときに、ココファーム、先ほど菊池シェフから出た、障害者の人たちが50年前に無農薬のぶどうのワイナリーをつくって、洞爺湖サミットの乾杯ワインなんか、あのワインを、やはりオマールのワインで障害をもった方が大切につくったおいしいワインなんですよというのを、飲んですごくおいしかったわけですね。

ということは、ただ私たち、フレンチのお店でフレンチを食べに行ったところで、障害をもった人たちのすごさを知ることができたんですね。

先ほど、市長が、菊池シェフにどうやってすてきなものを製品展開していけばいいって、すごく難しいと思うんですけども、その中で、今日うちのゼミ生が来ておりますが、農園フェスといって子供から高齢者、障害者から皆の人たちが農園を舞台に食や音楽とか、そういうものを通して、皆一緒だよ、楽しみは一緒だよという空間を作るということをうちの学生は、福祉コンシェルジュという形でいろいろ勉強させていただいているんですけども、そういうのもおそらく、その農園フェスもただ単に福祉の関係者だけが来るんじゃないで、皆、いろんなところからフェスを楽しみに来ている中にいろんな人たちがいろんな活動で参加して、楽しいのを一緒に楽しむという空間や機会作りということで、地域の障害をもった方々の、すばらしいつくったものを、普通に楽しめたりとか音楽で一緒に踊ったりとかという、そういうやはり空間作りとか。

あと、新田会長の、スポーツと、ということで、今日午前中に地元のプロレス団体のHEAT-UPの大会で、相模原出身の選手が、この大会の準備と子供たち向けのプログラムをやってこちらに来たんですけど、このHEAT-UPの大会で、新百合ヶ丘の大会です。障害者の人たちも仕事としてチケットのもぎりとかチラシの帳合とか、または会場の誘導とか、場内の片づけとかいう、そういう仕事ということをやっています。でも、そこにはプロレスを楽しむ市民の人たちが、入場ゲートのところで、「おっ」という感じで反応するわけですね。それで、トゥエンティワンホールというのは飲食禁止なので、障害をもった方たちがプラカードをもって、ここは飲食禁止です、どうぞみたいな感じで笑顔でおもてなしをするということをやらせていただいております。おそらくですけども、今日こちらにいらっしゃる皆様方と一緒に、いろんなきっかけ作りとか場をつくっていくことが、障害を持っている方々が活躍できる、そういうところを自然に我々は知ることができて、それこそ、共生社会というか、暖かい社会をつくっていけるんだろうなと、それをどうデザインしていくかということが大事だなと思いますので、何度も話は出ますが、今ここにいらっしゃる皆様方と一緒に、まず3年後のパラリンピックで何ができんだろうかということをデザインできるといいんじゃないかなんてふうに思っております。

市長：ありがとうございます。

ゼミ生の学生さん二人来ていただいて、福祉…、何コンシェルジュ。

中野さん：福祉コンシェルジュというものを、ちょっと私たちで、実際にシェフの話だったり、先生の話が

あったんですけど、農園フェスと、あと多分皆さんどっかで見たことがあると思うんですけど、かわさき色輪っかつなぎ。あと、プロレスもあったり、HEAT-UP。そういうことで、私たち、福祉コンシェルジュという活動をしてきました。福祉コンシェルジュというのは、子供から高齢者、また障害のある方、外国人、誰もが楽しめる、そういったものにお手伝いをするスタッフのことです。

お手伝いの方法ってすごいいろいろあると思うんですけど、例えば車イスだったら車イスを押してあげるように手伝うとか、また当日は手伝い以外にも、あらかじめバリアフリーの場所を確認しておく、そういったことなど。また、子供だと迷子の子供の方がいらっしゃったときの対応だとか、あと簡単なことという道案内。そういったこともやっている。誰もが楽しめるようにお手伝いするスタッフのことを指します。

オリンピック、パラリンピックに向けて、誰もが楽しめるようにおもてなしをする環境がまだ十分とは言えないと感じております。

そこで、オリンピックまでまだ3年間あります。その3年間で福祉コンシェルジュの育成をして、この担い手ですね、それを、子供から高齢者、障害ある方、外国人、誰もがなることができ、講習会を受講していただいて、受講するだけだと、ただ知識を入れて終わってしまうので、その後川崎市内ってすごいイベントが多いと思うんですよ。スポーツのイベントがたくさんありますし、そういったイベントで実際に活動していただいて、市民の方に広く、福祉コンシェルジュというものがこの川崎にはあるんだということを認識をしていただく場としても、実際に活躍をしていただこうかと思います。

これを3年間行うことによって3年後には川崎市内に多くの福祉コンシェルジュの方がいて、オリンピック、パラリンピックで外国人などが来たときにも、誰が対応するというわけではなく、川崎に来れば気軽に楽しむことができる、そういった街になっていくと思います。

私たちは、今年の夏に、川崎の多摩川を使ったイベントを何か企画できないかということで、資料左下のほうに書いてある、川まつりというイベントを企画しました。このイベントでは、先ほどからお話も何度もあるように、この川崎市内ですごい活躍されている方々をまとめて、イベントして楽しめる。外国人の方にも向けたりしたりして、宿泊型のイベントとして活躍できる、オリンピック、パラリンピックに向けて、パブリックビューイングなどで応援することもできる。そういったイベントを企画しました。このイベントと福祉コンシェルジュをこの、川崎市内で活躍している皆さんと一緒に広げていくことで、先ほどから言っているように、世界中から来る人たちをおもてなしすることができる。また、意識をつくっていくことで、福祉のまちづくりにも繋がると思っています。

さらにそれだけではなくて、観るスポーツと支えるスポーツをつくっていくことで、今川崎市が取り組んでいる、パラムーブメントの一環となるんじゃないかと考えています。

以上です。

市長：ありがとうございます。

なかなか立派な資料ができているじゃないですか。

川まつりってやったんですか。

和さん：やってないです、企画として。

市長：企画としてあるということですね。ぜひ、いろんな方たちがいらっしゃるの、巻き込んでいただいて頑張りたいと思います。ぜひ、こういったかわさきパラムーブメント今やってますけれども、いろんな取り組みが川崎の中で、至るところで出てくるというのが、まさにムーブメントなので、そのムーブメント作り出していきたいなというふうに思います。ありがとうございます。

またいろんな仲間がふえたと思いますので。

若い人たちからもいいプレゼンテーションいただきました。

せっかくですから、今までのところで、商工会議所からも来ていただいております。小林さん、地元の商工会議所の多摩支所長さんということでもありますけれども、よろしくお願いします。

小林さん：皆さんこんにちは。

当所は、市内の個人企業、法人企業、団体等を会員として地域総合経済団体として、中小企業の経営の支援をしております。今日お聞きした中でも、どの団体も商品として立派に販売しているということですので、先ほど市長がいました、名産品認定事業とか、そういったものにも3年に1度なんですけど申し込みいただくと、広報小冊子をつくったり、そういうなかなか小さいところできない後方で支援できるんじゃないかと思っておりますので、ぜひそういった事業があるよというのを知っていただいて、3年後になりますけどまた応募とかいただければと思います。また、今回ここに参加していろんな団体の商品を知ったということもありますので、区民の皆様にも、こういった皆さんの商品を知る機会があったらいいのではないかなと思いました。

いろんなイベントを出店しているということですが、当所のほうでもイベントで声掛けしておりますので、販路拡大に御利用いただければと思います。

よろしくお願いします。

市長：ありがとうございます。商工会議所さんにもぜひ御支援いただければと思ってます。

ここにお集まりいただいている団体の皆様、パサージュ・たまには全員御参加いただいているグループですか。はぐるまさんは違いますかね。

金田さん：いや、入っております。

市長：皆さん全員、ということで横はよく知っている。今回の大きな車座で、インターネット配信もされていますけれども、こういった活動、いろんなそれぞれの団体はこんなにいいことを、すばらしい製品だとかサービスだとかというのを作り出しているんだということを、地元の商店街の皆さんだったり、商工会議所だったり、町会の皆さんであつたりというふうな、あるいは大学だとかという、多くの人たちに知ってもらうということがとても大事ななというふうに思うんですね。ですから、いろんな団体が繋がっていくということがすごく大事ではないかと思っています。

区長何か、今の輪を広げていく、繋がっていくということで地元としてどうですか。

区長：多摩区長です。多摩区でも、もう17回になります、多摩ふれあいまつりを毎年開催し、さきほどから出ている、パサージュ・たまに毎月1回、1階アトリウムでこういった福祉施設また作業所のかかわった活動の紹介とか製品の展示、販売などを通じて、そこで当然地域の方々にも皆さんの活動とか、それからよさ、技術も含めて知っていただくという機会を設けています。先ほど来、作業所さん同士でも繋がりというのももちろん広げていくのは非常に大切だと思っているので、やっぱり今話伺っていて、皆さんそれぞれの技術なり製品をお持ちなので、それをいかに広げていくとか広報していくか、または繋げていくということがやっぱり必要なんだろうなって私は思っていますので、多摩区としてもそういった皆さんと地域の方々又は企業と繋がったようなそういったまち作であるとかきっかけ作り、そういったところをこれからも多摩区としては取り組んでいきたいというふうに思っております。引き続きよろしくお願いします。

市長：ありがとうございます。

ごめんなさい、新田会長の次に聞けばよかったですね。スポーツ繋がり、スポーツセンターから塩田さん、来ていただいておりますので。

塩田さん：皆様こんにちは、多摩スポーツセンター、塩田と申します。

先ほどの学生の皆さんもおっしゃってましたけれども、もうすぐ2020が近づいてます。オリンピック・パラリンピックありますが、アスリートの方々が活躍、特にパラリンピックに参加される全ての方々が活躍できる場、障害をお持ちの方、お持ちでない方に対して、可能性というものを広く発信する場になると思います。そのお手伝いを我々、川崎市のスポーツセンター七つが手を組んで、協力していければと思っております。

観るだけではなく、実際に動いていただく、特に多摩スポーツセンターに関しましては、バリアフリーということで、障害をお持ちの方、お持ちでない方でも共存ができる施設になっております。プールのみならず、アーチェリー場ですとか、そういった変わったスポーツという言い方は変なんですけど、特化したスポーツが体験できますので、ぜひ一度お越しいただきまして、四つの団体の皆様、ぜひスポーツセンター中で、販売会だとかできればうれしいなと思っておりますので、ぜひそういうのを与えていただければ御協力させていただきますので、今後ともよろしくお願いいたします

市長：ありがとうございます。

またスポーツの可能性が、また増ええました。ありがとうございます。

ぜひ、そういったところにもコラボレーションできればありがたいなと思います。せっかくですから、来ていただいている方に少し、一言ずつでもお話いただければありがたいんですが、区町連からも来ていただいております。吉田さんと古谷さんもお出でいただいておりますけど、少しずつ一言ずつでもちょっとコメントいただけますでしょうか。

吉田さん：私、五反田自治会長で、1500世帯いるんですけど、その中で五反田としては、五反田川というところに、ちょっとこれは多摩川あゆ工房さんにちょっとお尋ねしたいというような感じでございますけど、あそこではこいのぼりだとか、それから七夕だとか、五反田自治会で、盆踊りなんかやってるんですけど、そういうときにこのようなお願いで、例えば100個こいのぼりの、先ほどちょっと新田さんなんかもおっしゃったような、鯉のそんなようなお魚の形をしたお菓子みたいなをつくっていただけるかなというのも、これもどれぐらいのお金で、もしお願いするんだったらですよ、どのぐらいのが100個単位だとか、200個単位だとか、そういうことがちょっと教えていただければなというふうに思っております。

今現在では、オーケーだとか、そういうところから買ってるんですよ。お一人、こいのぼりなんかやるとき、結構100人近く、80人から90人来るんですけど、そういうところで買って、そしてお子さんきたときにお渡ししているということをやっているあるいはそういうときに、そういうものを私のほうで何かつくっていただけるんならばやっていただけるかなというふうなことをちょっとあります。

それともう一つ、石井さんのほうのはっぴわーくさんのほうで、梨というのは、梨のジャムというのはどれぐらいから、今始めてどのぐらいできるのかなというのを、何個ぐらいで家庭でもできるのかな、ちょっとそれはふと思っております、一つお尋ねしたかったんです。

以上でございます。

市長：それ家庭で作らないで、はっぴわーくさんでそれを買ってください。

あゆ工房さんでは、こういった相談にも乗っていただけるということですよ。

坪井さん：もちろんです。

市長：吉田さんのような。

坪井さん：ちょうどこどもの日のあたりに、こいのぼりのクッキーを得意としておりまして、そのプロフェッショナルをこちらにつれてきてますので。個数も、幾つかからでも地域のものは作るようにできますので、ぜひとも後ほど。

市長：佐藤さん大丈夫でしょうか。

佐藤さん：はい。

市長：古谷さんちょっとコメントいただけますか。

古谷さん：中野島町会長の古谷でございます。

皆さんの発表を聞いて、すばらしい発表だったと思いますが、私どもはこういう製造販売とか、そういうのはやっておりませんが、いろんなイベントについて、カリタス学園さんには、音楽を通じて、地域教育会議というのものがあまして、それに中野島中学校の、中野島小学校も地域に含まれましたが、音楽を通じての交流ということで、他の公立学校との、そういう交流を、10何年になりますが、そういうイベントを通じて深めて地域を広げていってまいります。

それと、あゆ工房さんとは、今年はちょっと雨で運動会のほうは流れましたが、毎年運動会のほうには参加していただいて、雰囲気を楽しんで盛り上げていただいて、運動会ではなくても他のイベントをあゆ工房さんは快く受けていただいて、地域のためにぜひなればということでやっていただいております。以上です。

市長：ありがとうございます。

そういう意味では、学校のカリタス学園さんの、この波及効果というか発信力というのを、学校があるんですけども、自治会・町内会のこの発信力というか伝播力というものすごいものがありますから、ぜひ多摩区の区町連の皆さんにも御協力をいただければというふうに思います。

あゆ工房さんもそうですし、こんなにすばらしい活動をされている方たちがたくさんいるということ、ぜひ伝播していただきたいなと思います。

多摩区の社協の会長の田村さん、お見えになってますので、よろしいでしょうか。

田村さん：社協のモットーは、この地域に暮らしてよかったということがありますがけれども、本当に、障害をもった人も、持たない人も、子供からお年寄りまで生きがいのある生活ができる環境を作ろうというようなことで、いつも苦勞しておりますけれども、本当にものづくり、障害をもったものづくりに得意な子もいるし、私たちは地域の中野島の音楽祭については、そこに参加して踊ってもらったり、それから福祉の集いには、来て歌ったり踊ったりという、参加が大切ではないかなというふうにいつも思っております。

本当にそういう中で、それぞれの得意を活かされていけばいいんじゃないかなと。そして私たちも、そのことに刺激されて、さらにいい社会が、地域ができればと願っております。

以上です。

市長：ありがとうございます。

三田の町田さん来ていただいておりますけれども、三田のこの取り組みもまた有名ですけどもね、ぜひ。

町田さん：ありがとうございます。

隣の駅、生田駅の三田という地区で、みた・まちもりカフェというカフェをやっております。コミュニテ

ィーカフェなんですけれども、町田と申します。地域の住民の皆と一緒に、大好きな三田の街で、いつまでも長く暮らして元気でいこうねということで、なるべく皆と一緒に飲食をともにしたり、それから講座とかの活動したり、あと、川崎市の寺子屋事業をさせていただいたり、小学校でしたりしております。

先ほど区長のほうからも、場作りという言葉をいただいたんですけれども、やはり私も多分各小学校区に一つ、コミュニティーカフェがあると、例えばいろんな住民の方がそこに集ったりできるので、今日今日の皆さん方がプレゼンしてくださった、いろんな品物、食べ物をそこに置いたりすることができると思いますし、それからやっぱり多摩区は特に山坂が多いので、本当に隣の町なのに大変で、多摩区役所に来るのに南生田のほうの方ってとても大変だったりするんですね。なのでやっぱり、その地域地域に昔あった縁側とか、あとお寺とか人々が集まるような場所のかわりとして、コミュニティーカフェがあればいいなと思っております。

特に、月に1回認知症カフェということをやっているんですけれども、そのような認知症カフェで、これからどんどん認知症の方が増えてきてしまうという、地域でもうやりなさいという方針なので、地域で暖かく見守って支え合っていけるような、そういう取り組みをしていって、頑張りたいなと思っております。

ぜひ、コミュニティーカフェというか、そういうようなものを、事業所があるところは事業所が管理をしていただければ地域の事業所ということで、多分すぐ開くことができると思いますし、いろんなやり方があると思うんですけれども、そういう活動をぜひ応援していただければなと思っています。

市長：ありがとうございます。

町田さんとかは非常に、コミュニティーカフェの走りのようなところかもしれませんが、本当に居場所としてのカフェというようなのが、多摩区内でもそうですし、川崎市内、ものすごいこの数年間で出てきましたね。

居場所作りとかというふうなのは、これから本当に誰にとっても大事なところだと思うので、まさに、本当にリーダーとして、これからも水平展開、御尽力をいただければというふうに思っています。

町田さん：リーダーというのはとんでもないんですけれども、問題ごとがたくさん集まってくるんですね。なので、そうするとそこに、役所の方が来ていただければ、いろいろ探さなくてもわかるというようなところがあるかなと思うんです。

市長：ありがとうございます。

遅くなりました、J Aセレサさんから来ていただいておりますので、桐生さん、よろしくお願いします。

桐生さん：J Aセレサ川崎の桐生ですけれども。今日は、この場に参加させていただきましてありがとうございます。

お話の中で、やはり地産地消という言葉が出てきまして、これ、私どもの推奨しているそのものでございますので、できれば、今言われたとおりに皆様方の橋渡しをできればしたいと思っております。

それで、今、私どもの大型直売所ですね、生産物直売所が2店舗ございます。黒川駅とあと宮前区ですね。こういうところにできましたら、今お話に、自分の決定権はございませんけれども、できましたら今の販売を少しでも入れられればいいのかと思っております。特に加工品なんかは人気がございます、地元の方々がやはりジャムのようなものをつくっております。そこの別のブースを設けて、できればそういう、こういう障害者の方がつくった商品ですと、宣伝をできればしたいなと個人的には思っております。

また、以前私長沢のほうの支店にいたときに、組合員さんと建物を建てるときに、障害者施設を建てたということでお話がございまして、障害者施設を建てたその後なんですけれども、また御相談になりまして、農家の方とちょっとお話をして、しいたけ作りを栽培したいされまじたりということで、その障害者の方

たちを招いてしいたけ栽培をしたいと。じゃあ講師はどうするんですかっていったら、そこの農家の方を講師として作らせる方、ぜひセラサも登録をさせて販売をさせてということで、今もう3、4年たったかな、今順調に推移しておりますので。また、そういう話がまたちょっとございまして、障害者施設を建てたいという話もたまにございますので、そういう場合については、ぜひそういう障害者の方たちに提供できるものがあれば、御紹介して提携できればなと思ってます。

以上です。

市長：ありがとうございました。

それぞれに地産地消というキーワードも出てきましたが、物だけじゃなくて、何というか、いろんなものが農産物だけじゃなくて、いろんなものが地域の中でうまく循環していくということがすごくすてきなことだなというふうに思うので、今日今日も僕話していて、自分が知らなかったなということがたくさんあったんですけども、こうやって集まっているいろんなことを話していく、こういう知恵あったかというふうなのが見えてくる。そしてまた新しいコラボレーションが生まれるということというのはまた新しい価値を生み出していくということになると思うので、ぜひこんな取り組みをもっともっと広げていきたいなというふうに思います。

今日は、お昼、FM横浜で公開収録というのがクイーンズスクエアであって、そこで話してきたんですけど、アナウンサーの方が、多摩区ののらぼう菜、川崎の魅力を伝えようという番組だったんですけども、そこで六つぐらいあったなと。結構多摩区の話題というのが多かったですね。生田緑地とか、二ヶ領用水とか、それからのらぼう菜。ちょっとびっくりしましてですね、横浜のクイーンズスクエアの皆さんはほとんど「のらぼう菜？」って感じだったんですけど、でものらぼう菜を知っていただいた。のらぼう菜といえば、あゆ工房さん、のらぼう菜のクッキーも、もう作ってございますよね。僕、区民祭かな、何かで買わせていただいて食べたんですけど、非常においしいクッキーで。ああやって、いろんな入り方であると思うんですね。のらぼう菜を知った人が、のらぼう菜クッキーだわというふうに手に取って食べると。いろんなチャンネルの入り方があると思うので、そういうチャンネルをもっと、もっと多くふやしていきたい。多くふやしていくんだけれども、チャンネルのつけ方がわからないっていったときには、妹尾さんのような繋げていただく人というのが、思いはあるんだけど、どうやって繋がるのかがちょっとわからないというふうな方は、妹尾さんに相談するとか、あるいは中間的に支援、伝えてくれる役割の人というふうなのがいると随分助かるんじゃないかなというふうに思います。

何か、スポーツセンターのお話、塩田さんのお話聞いたときに、おっ、そうかと思ったときに、ゼミの学生さんたち、まさにパラムーブメントの話繋がるなと思いましたよね。

ぜひ、繋がっていただいて、まさに川崎の場合は例えば障害者スポーツをやろうということで、なかなか川崎市内というのはスポーツ施設というのが非常に足りないというふうな、人口の割にはですね。なので、なるべくその専用ということよりも、むしろ今の施設を共存して使っていくということに皆で工夫を凝らしていこうよというふうな形でやっているし、スポーツセンターもそういう形で運営をしていただいていく。さらにその機会をふやしていく。そこにまた地域の学生さんなんかも加わっていただいてというふうな形で、いろんな加わり方があると思うので、ぜひ今日今日は第1段というか、もうふれあい祭りもそうですし、パサージュたまもそうですし、こうやって連携していくということも大事ですけども、さらに大きな輪に広げていって、先ほど来も商談がまとまりそうな話が、新たなコラボレーションが入ってくる。あるいはJRさんの取り組みを見て、こういうすてきな大企業があるのかといったことを、誰かがまたまねし始めるというふうな、いい好循環に繋げていくことというのが大事なんじゃないかなというふうに思わせていただきました。

大体時間が予定時刻になってきておりますけれども、最後にこれはちょっと言っていこうとか、あるいは共有したいなと、あるいは最後、ちょっと聞いておきたいなとかということもありましたら、何かあります

でしょうか。田中さんどうぞ。

田中さん：先ほど、あゆ工房さんにクッキーをつくっていただきたいとかいう話が出ていまして、実は今日今日、こちらに長屋なんですけど、川崎きた作業場という作業場で、自主製品もつくっているんですね。食べ物以外でも、そういう、ちょっと本人にかかります。

長屋さん：手芸品を主につくっております、編み物でアクリル毛糸を使ってたわしをつくったり、あとは雑巾にししゅうをして台布巾として使っていただいたり、ミシンでエプロンや巾着などをつくっております。あとは、みのむし君という、みのむしのマスコットもつくっております。なかなか、一度買ったら大切に皆さん使っていただいているので、ジャムのように何度も買ってもらうというのが難しかったり、なかなかいろんな課題があるんですけど。

田中さん：そういう商品を作るので、何か食べ物をもちろん。食べ物じゃなく、記念品とか粗品でも、何かありましたら教えていただきたいなと。最後に時間をいただきましてすみません。

市長：ありがとうございます。

この部分は、はっぴわーくさんのところ、ハンドタオルに名前を入れていただいたのは、はっぴわーくさんですかね。

田中さん：いえ。

市長：これは違う。

田中さん：でも同じような。

市長：同じような。そうですか。あれすごくきれいですね。白いハンドタオルにクローバーとてんとう虫がついている柄なんですけど、すごくすてきで、そこにイニシャルも入れてくれると。その場で入れてくれるというので、これはすてきだと思って、非常にお気に入りです使っているんですけど、ああいう製品もやられているということですか。

長屋さん：ししゅうで。

市長：例えばどんな商品ですか。手芸品っていってももろもろですけど、たわし以外に。

長屋さん：雑巾の生地の下絵を描いて、ししゅう糸でししゅうをしていたり、あとはししゅう関連でいいますと、ヘアゴム。くるみボタンにお花のししゅうをして、今も新しく新製品としてつくっております。あとは、エプロンを1,500円でつくっております、パサージュたまでも毎回売らせてもらっているんですけども、リピートしてくださる方が多かったり、いろいろ肩が落ちないように工夫してつくったりとか、ポケットも入れやすいように斜めにしてつくったりとか、いろいろ使いやすくして結構人気な商品ですので。

市長：そういうのはカタログとかあるんですか。

田中さん：カタログは、ちょっと・・・、作ります。

市長：多分そういうようなのもって、いった感じのところを見ると、もしかしたらヒットするかもしれない。なるほど、そういう製品もあったかというふうなことがあるかもしれませんので。

こういう今のような話が区内、あるいは市内各地で行われていくということが、本当にすてきなことだなというふうに思うので、こういうふうな輪をきっかけにさらに輪を広げていきたいなというふうに思います。そういうことが、川崎の進めているパラムーブメントが、さらに市民運動というか、まさにムーブメントとしてなっていくということを皆で力を合わせてやっていきたいなというふうに思っております。

今日今日は短い時間で、もっともっと話を聞きたいなというところもありますけども、今日今日は多くの傍聴者の方に来ていただいて、いい情報交換ができたなというふうに思います。

御参加いただいた皆さんに心から感謝を申し上げて、この会を閉めたいと思います。本当にありがとうございました。

司会：ありがとうございました。

以上をもちまして、第32回区民車座集会を終了とさせていただきます。どうぞお忘れもののないよう、お気をつけてお帰りください。お帰りに際には、受付時にお渡ししたアンケートの御記入に御協力いただき、出口にいる職員にお渡しください。お車でお越しの方は、会場にございます認証機に駐車券をお通しください。なお、入り口付近に各施設のチラシ等が置いてございます。もしよろしければお持ち帰りいただき、また今後のコラボに役立てていただければと思います。

本日は、御来場いただきまして、誠にありがとうございました。